

越谷市の北越谷から大林・袋山にかけての元荒川沿いと、増林から大吉・向畑にかけての古利根川沿いの地域では、昭和三十年代ごろまで桃の栽培が行なわれていた(1)。今ではその姿を見ることはできないが、江戸時代には花見の名所として知られ、文人墨客によつて、越谷の桃が浮世絵や紀行文などに描かれている。

江戸後期、幕府が編さんした地誌『新編武蔵風土記稿』では、古利根川の大吉側から望んだ対岸の景観を「松伏領数村の桃樹数千株打ち並び、花の頃は景色いとよし」(2)と賞していることから、当時、越谷から松伏にかけては桃の名所として広く知られていたことがうかがわれる。

### 越谷の桃は浮世絵にもなった。

江戸時代末期に活躍した浮世絵師の歌川広重は、越谷の桃の風景を錦絵に残した。初代・広重は『富士三十六景』に、「武蔵越かや(こしがや)在」として、富士山を背景に越谷の桃を描いた(資料1)。二代目・広重も『名所三十六花撰』の中で、越谷の桃を描いている(資料2)。

### 越谷の桃は文人にも賞された。

江戸後期の儒学者・成島司直(なるしまもとなお)は、『看花三記』と題した紀行文の中で、杉田(現横浜市)の梅、小金井(現小金井市)の桜とともに、越谷の桃を江戸近郊花見の名所として紹介している。越谷を訪れ、元荒川流域の桃を目にした司直は、「目に映る野や岡は、すべて桃の花であり、まるで紅の雲の中を往来しているようである」(3)と称賛し、大房(現北越谷)から松伏の築比地(ついで)にかけての元荒川土手沿いには、桃林がたえまなく続いていることを記している。

同じく江戸後期、江戸の小日向(こひなた)現文京区)に住む釈大浄(津田敬順)という僧も『十方庵遊歴雜記』という著書の中で、越谷の桃について、「大林から元荒川の川筋に沿って、約千七百メートルにわたって見渡すかぎりの桃林」(4)であると感嘆している。また、初夏になると、「採れた桃の実を江戸・伝馬町の天王祭で売り出し、桃の走りとして、越谷の桃が季節の果物のひとつとなっている」(5)とも述べている。

越谷の桃林を「桃源」とたたえた人もいた。明治三年（一八七〇）三月、古河藩主の接待をうけて日光街道越ヶ谷宿を通った文人の成島柳北は、「この駅〔越谷は〕尽くる処桃林あり幾万株あるを知らず、都人称するところ越谷桃源とはこれなり」と、『常総遊記』で語っている（6）。

「桃源」とうたわれた今はなき越谷の桃。記憶にとどめておきたい原風景のひとつである。

## 添付資料

（資料1）歌川広重「武蔵越かや在」（富士三十六景）…

「国立国会図書館デジタルコレクション」

(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1303337>)

より転載

（資料2）喜斎立祥（二代目・歌川広重）「東都越谷桃」（名所三十六花撰）…

「国立国会図書館デジタルコレクション」

(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1308734>)

より転載

## 引用文献

（1）越谷市制40周年記念誌編集委員会編（一九九八）

『市制施行40周年の足跡 ときを超えて』

越谷市、「果樹、古くは桃の産地」一六二頁

（2）蘆田伊人校訂（一九九六）

『新編武蔵風土記稿 第十卷（大日本地誌大系）⑯』

雄山閣、「大吉村 古利根川」一八〇頁

（3）越谷市教育委員会社会教育課編（一九八〇）

『越谷の歴史物語（第二集）』

越谷市教育委員会教育長、「越谷の桃」七七頁〜七九頁

（4）同右、「大林の桃林」八三頁〜八四頁

（5）同右、「桃林の散策」八四頁〜八六頁

（6）同右、「越谷の桃林と藤」七九頁〜八一頁



三十六花撰 寄別2-7-1-7 00-018



富士三十六景 1帖 寄別1-9-1-1 00-013

(資料2) 喜斎立祥(二代目・歌川広重)「東都越谷桃」(名所三十六花撰)  
 出典:国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1308734>)

(資料1) 歌川広重「武蔵越かや在」(富士三十六景)  
 出典:国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1303337>)